

- 1 日時：2024年3月23日（土）13時00分～17時00分
- 2 場所：慶応義塾大学三田キャンパス北館大会議室
- 3 参加人数：83名（会場41名・関係者含む+zoom42名・申込数）
- 4 内容の概略：

(1) 篠原総一代表（経済教育ネットワーク代表）、鈴木深氏（東京証券取引所金融リテラシーサポート部）からの挨拶の後、進行役の杉田孝之先生（千葉県立津田沼高等学校）から趣旨説明があった。

(2) 「途上国に必要なのはフェアトレードか、ビジネスか？：グローバル経済のなかで経済格差をどう教えるか」の講演が明治大学情報コミュニケーション学部の島田剛教授からあった。

（*島田先生の発表資料は別添参照）

島田先生は、自己紹介のあと、JICA や国連での体験を踏まえて、①なぜ日本の学生は国際的なことに関心が薄いのか？ ②アフリカから考えた日本のこと、直面する同じ課題、別の課題、③どうしてフェアトレードは昔と同じなのか？ビジネスと何が違うのか？の三つの問いをあげて、順番に説明された。

第一の問いでは、国連や世界銀行などにおける国際交渉の実際を紹介しながら、日本の学生の関心の二極化を分析され、そこに切り込む視点を紹介された。

第二の問いでは、コーヒーを事例に、アフリカの経済とそこにおける格差を見る視点として、歴史的にロックインされている制度、アフリカ経済の近年の動向を人口、雇用、新自由主義との関わりから分析されて、産業政策やカイゼンなど日本にも役割があることが紹介された。

第三の問いでは、神保町コーヒープロジェクト、フェアトレードのフェアの捉え方のWTOとオーソドックな理解との違い、福島第一原発とコーヒーの関わりを紹介されて、フェアな取引が当たり前の世界になるべきであること、貧困解消にはビジネスとフェアトレードや援助とを近づけていく必要があること、最初の一步が大事で、それは教育に期待するところであるとして講演をまとめられた。

(3) 講演を踏まえて二人の質問者からの質問と回答があった。

兼間昌智先生（札幌大学）からは、中学生の学習でのフェアや貧困をどのレベルまで教えた方が良いか、コーヒープロジェクトでの学生の様子の質問があった。また、金子幹夫先生（神奈川県立三浦初声高校）からは、包摂、収奪、正義などに訳されるフェアの概念をどう理解するか、国際的なことに関心が薄い理由に距離が関係するののかという質問があった。

（*それぞれの質問内容は別添資料参照）

島田先生から、兼間先生からの質問には、本当に自分たちがやりたいというパッションを持つところまで連れて行きたい。コーヒープロジェクトでは学生はものを創ることにはノリノリであるがそれを研究のレベルまで深めさせるのが課題であるとの回答があった。

金子先生からの質問には、細かい概念の違いよりもフェアという概念に関心を持ってもらえれば良い。距離は関心だけでなく経済学でも重要な要素であることが紹介された。

進行役から、効率と公正、幸福・正義・公正と貧困の支援の関連の問いがあり、島田先生から、アセモグル（MIT）に注目してみたいとの回答があり、前半の講演を終了した。

(4) 後半のパネルディスカッションはまず、小谷勇人先生（春日部市立武里中）と杉浦光紀先生（都立井草高校）からの授業実践の報告からはじまった。

（*それぞれの報告内容は別添資料([小谷先生](#)・[杉浦先生](#))参照。）

お二人の実戦報告に続いて、藤井剛先生（明治大学文学部特任教授）から、教科教育の立場から「国際経済の授業のつくりかたとは？」の報告があった。

（*同じく報告内容は[別添資料](#)参照。）

(5) 三つの提案を踏まえて、島田先生も加わり討論が行われた。

まず、島田先生から、気になった点として、杉浦実践のバングラディッシュと小谷実践のアフリカをつなげて話をするとこの30年の変化が理解できるだろう、失敗国家に関するドナー（援助国）の議論は途上国に対して上から目線の言葉なのが気になることがあるので、対等の立場で考えるにはどうしたらいいのかという論点も考えるとさらにいいのではないかと、格差がどこまでゆるされるかを考える際には具体的に考えるべき、物流に注目する生徒が出てきたのはすごく、アフリカには内陸国が多いことが特徴だが、港について調べても発見があるだろうと4点の指摘があった

これを受けて、進行役から、報告授業において、実践の売りとなる点と、経済の視点をどこに入れたのかとの問いかけがあり、小谷先生からは、この発表のために仕掛けた、経済の視点を入れた、経済成長、教育のところとの回答がそれぞれあった。

杉浦先生からは、教科書通りでなくカリマネの発想で時間を捻出し、ファストファッションの安さの裏側とその構造に注目させたこと、自由貿易のリカード以外の理論も入れたこととの回答があった。

また、藤井先生からは、家庭科とのコラボの際に気を付けたい公民科の視点の指摘があった。

島田先生からは、開発経済学で途上国経済を位置づける際に違いがあること、フェアトレードによって経済がどう変化したかの研究が始まっているがそれほどの効果がないとの結果もでていて、高くとも売れるブランディングにはビジネスの観点が必要なこと、障害者を雇用しているコロンビアのコーヒーの事例などが紹介された。

フロアからは、吉田先生（渋谷教育学園幕張高校）から市場価格以外の公正はあるのか、また村田先生（千葉県立市原八幡高校）からフェアを扱う時に倫理、哲学は必要かの質問があった。

前者には、島田先生から、フェアトレードでは市場価格にプレミアムを乗せるのが正当とされているが、コーヒーなどは先物取引の対象になっていたり5年サイクルでの乱高下があったりするので何が公平かは簡単には言えないとの回答があった。後者には、杉浦先生からピーター・シンガーやロールズの議論が参考になるのではという指摘と、島田先生からは、アマルティア・センの議論にも注目したいとの指摘があった。

最後に、進行役の杉田先生から、フェアという言葉の扱いとして、公正・包摂をどう整理して探究に持ち込むか、生徒に身近な教材をどうつくるか、国際経済・国際関係に関して生徒に関心

を持たせる授業設計という三つの課題を本日の教室を手がかりに実践して欲しいとのまとめがあり、各登壇者の一言をいただいて、後半のパネルディスカッションを終了した。

以上、記録と文責：新井